

『加藤蔓青園案内』：大宮盆栽村と蝦夷松

前号に引き続き、大宮盆栽村100周年記念特別展「緑のフロンティア—大宮盆栽村100年—」に展示した寄贈資料『加藤蔓青園案内』を紹介します。本資料はさいたま市内在住の個人から令和5年(2023)に寄贈いただいたもので、
「蝦夷松の父」と呼ばれた蔓青園の二代目加藤留吉が戦前に発行した貴重な園紹介のパンフレットです。



『加藤蔓青園案内』

大宮盆栽村は、開村直後の大正15年(1926)の秋には「技術陳列会」をスタートするなど技術研鑽に取り組み、五葉松や蝦夷松などの培養技術の確立と向上に注力しました。昭和初期に国後島の国有林に自生する蝦夷松の採取許可が得られたことにより、空前の蝦夷松ブームが起きたことはよく知られています。なかでも盆栽村は、蝦夷松の盆栽に卓越した村でした。昭和8年(1933)の盆栽専門誌『盆栽』13巻7号には「盆栽村の蝦夷松陳列会」と題して盆栽陳列会の記事が掲載され、「現今盆栽村の盆樹の大半は蝦夷松である」と記されています。大宮盆栽村に移転する以前の蔓青園は、東京の駒込神明町に園を構えており、明治20年代は万年青や蘭などを商っていたようです。大正に入る頃から蝦夷松に力を入れはじめ、盆栽村においては「蝦夷松専門」の看板を掲げるようになりま

されており、まさに蝦夷松尽くしの一冊です。□絵には模様木、斜幹、双幹、寄せ植え、石付き、根連なり等、様々な樹形で仕立てられた蝦夷松の写真が掲載され、参考価格も記されています。
「蝦夷松の経歴」によれば、加藤留吉は早くから北海道・樽前山(現苫小牧市)の蝦夷松に興味を持ち、大正3年(1914)に初めて千島列島の蝦夷松の採取に訪れました。しかし、自然環境がまるで異なる関東平野での培養は容易ではなく、当初は枯れる木が多く、5、6年ほど試行錯誤を繰り返して、研究に努めたといえます。当時は「其頃は何人も研究しておりませんから、聞人は無し」という状況だったと回顧し、まさに蝦夷松盆栽の先駆けでした。留吉による蝦夷松の研究成果は盆栽誌の誌面にも発表され、蝦夷松ブームを牽引しました。
パンフレットには刊記がありませんが、冒頭に掲載された献上品の蝦夷松盆栽の写真から、昭和10年(1935)頃に発

行されたとみられます。写真には「当園の光栄」「東関東陸軍大演習行幸に際し献上品 蔓青園培養品 大宮町より(鉢古渡烏泥角盆) 外宮殿下献上品参鉢」と添えられており、昭和9年(1934)11月に、北関東において実施された「陸軍特別大演習」における昭和天皇行幸の

献上品に選ばれた蝦夷松であることがわかります。
蝦夷松献上の詳細は、埼玉県が刊行した「昭和九年陸軍特別大演習並地方行幸埼玉県記録」(国立国会図書館デジタルコレクション)にみるができます。埼玉県では県の特産品を献上するため、希望者に「献上願」と経歴書を提出させ、「本県代表として其の名に恥ぢぬ生産品を選定」したといえます。選ばれた留吉の蝦夷松は、「昭和四年北足立郡大砂土村(盆栽村)加藤留吉自ラ千島列島国後島古釜布二行半同地ニ於テ同業者力箱植ヲ一ヶ年為シタルモノヲ購入シ来リ針金

ノ掛替、剪定整枝ヲ行ヒ現形ト為シタルモノナリ」というもので、自ら国後島に赴き、古釜布ふるかまふの現地業者から入手した原木に針金掛けと剪定を施し、丹精を込めた一鉢でした。昭和4年(1929)に箱植1年目の原木を入手したとあるのも、パンフレットに掲載された写真はおおよそ培養6年目の姿ということになります。また、古格を漂わせており、国後島産の原木の質の良さと、留吉の高い技術が感じられます。
蔓青園は、大正14年(1925)10月に雑誌『盆栽』に半頁全面の移転広告を大々的に出し、大宮盆栽村に移転しました。また、盆栽村の開拓を先導した清水利太郎は上越産の五葉松の培養における先駆者であり、東京時代から新しい樹種の培養技術に研鑽を積んできた園が盆栽村に移転してきたことは、村の発展にとつて大きな意味を持っていたといえるでしょう。

ノ掛替、剪定整枝ヲ行ヒ現形ト為シタルモノナリ」というもので、自ら国後島に赴き、古釜布ふるかまふの現地業者から入手した原木に針金掛けと剪定を施し、丹精を込めた一鉢でした。昭和4年(1929)に箱植1年目の原木を入手したとあるのも、パンフレットに掲載された写真はおおよそ培養6年目の姿ということになります。また、古格を漂わせており、国後島産の原木の質の良さと、留吉の高い技術が感じられます。

當園の光栄



品上献上際に幸行習演大軍陸東關東
(盆角泥烏渡古鉢)リよ町宮大 品養培園青蔓
鉢参品上献上殿宮外

た。また、盆栽村の開拓を先導した清水利太郎は上越産の五葉松の培養における先駆者であり、東京時代から新しい樹種の培養技術に研鑽を積んできた園が盆栽村に移転してきたことは、村の発展にとつて大きな意味を持っていたといえるでしょう。

(大宮盆栽美術館
主査 菅原千華)

(部一の場養培)

